

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

中国系マレーシア人と適応力

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): Overseas Chinese, Bumiputera, multi-identitiesf 作成者: 内田, 雄一 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1071

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中国系マレーシア人と適応力

内 田 雄 一

Double Identity of the Chinese Malaysian

UCHIDA, Yuichi

Abstract

Of the 30 million Chinese living all over the world, 6 million are located in Malaysia. Occupying 30% of the whole population of the country, they produce 70% of the national income, while the Malays contribute only 20% of the country's production although making up 60% of the national population.

Even Malaysia's Prime Minister, Dr. Mahathir of Malay origin, accepts his people as not superior to their Chinese compatriots. Why? The Malays were embedded in a life of continuous and simple agriculture-fishery work ; on the other hand, the Chinese, pushed out from the Continent by calamities, were forced to try to share unfamiliar backgrounds. This same living within a homogeneous circumstance has cultivated in the Malays a mild and gentle demeanor; the cohabitation for survival in a heterogeneous environment has encouraged the Chinese to forge an even tough and rough character.

Urged by global capitalism, the world is to increase the inter-connectedness among different peoples. The daily contact with the unknown judges invalid the single identity.

The overseas Chinese, fostered by their multi-identities, will be even more an appropriate model of success in the internationalization of this 21st century.

Keywords : Overseas Chinese, Bumiputera, multi-identities

キーワード : 華僑・華人、ブミプトラ、マルチ・アイデンティティ

目次

I マレーシア華人

- 1 定着と繁栄
- 2 文明の構築なきマレー
- 3 マレー人優遇政策

II ダブル・アイデンティティ

『横断と変身』

I. マレーシア華人

1. 定着と繁栄

1874年、現在のマレーシアは英国の保護領のうちにいった。このときから数年を経て、錫とゴムの産業が飛躍的にのびた。

錫は、19世紀の半ばに勃発したクリミア戦争、南北戦争にさいし発達したカン詰め産業、そして、南北戦争後の西部で需要が急増したブリキ屋根の原材料として、欧米で需要が急増した。ゴムは20世紀初頭から急成長の画期的乗り物、自動車のタイヤになくてはならないものだった。ヨーロッパから白人が入ってくる前の18世紀、すでにマレー半島では錫が渡来していた中国人によってすこしづつ開発されていた。しかし19世紀末以降、その事業は英国資本にとって代われ、並行してイギリス植民地行政は移植したゴムの栽培を拡大していった。今日マレーシアが近代化、産業化の基盤としている道路、町、都市の整備はこのふたつの第一次資源の開発のおかげである。

東南アジア諸国において中国人が居住地の総人口に占める比率はすべて5%程度でしかないのに、マレーシアでは32%を占めている。主に華僑、華人から成る都市国家シンガポールの75%を除き、最大の数字である。なぜだろうか。英植民者の到着以前に、大陸を離れ早くもこの地にかれらが定着してやってきて

いたからである。土地のサルタンはかれらの来訪を歓迎した。中国人は困難に耐え、それに打ち勝つ根性を持ち、集団で農耕にそして森林の伐採に当たった。それに加え、規則正しい納税者でもあった。サルタンにとっては土着のマレー人より好都合な生産者であったかもしれない。それ故、中国人の数多い到着はよろこばしいことであった。そして植民地時代になると、今度は英系企業が錫鉱山の採掘、ゴムプランテーションの運営によく働くこの中国人の参入を是非とも必要とした。しかし絶対数がいつも足りなかった。その人手不足を補うため、大陸からの渡来を何度も呼びかけたほどである。中国人は続々とマレーの海岸に上陸してきた。

ボルネオ島では石炭、ロウソクの原料となるヤシ油を採集し、奥地から物産を運び出す鉄道建設にともない、材木用の木材を切り出した。1920年代の後半、サバ州でゴム園がつくられるとますます労働者が入用となった。半島部では錫鉱山の精錬に中国人の技術が欠かせなかった。そして1920年代の始めには内陸部から海岸に伸びる鉄道を建設した。産業らしい産業がなかった地域に植民地開発が進められたとき、もともと人口希薄の地では絶対的に人手が足りなくなっていた。

英植民地統治者は中国に向け移民奨励策をとった。契約を経て来る者には渡航準備金を貸与した。旅費も支給した。到着した時点で5エーカーから15エーカーまでの土地を無償で提供もした。(Wong,D.T.1998.P-27) この時期、大陸ではアヘン戦争の後、太平天国の乱(1850-64)が世情を不安にし、1900年になると義和団の乱が反西欧、反キリスト教を掲げ始まった。キリスト教徒が多い客家の人々は迫害された。清朝の統制はゆらぎ、治安を

コントロールできなかった。この頃、広東、福建両省一帯では過耕地が全面積の10%前後しかなく、食料にも事欠いていた。そこに河川の氾濫が続いて追い打ちをかけてきた。南海の彼方から届いたヨーロッパ人の誘いは渡りに船だった。生活調度品を袋ずめにして、数多くの男たちがそして何組かの家族が契約移民となって船に乗った。その他、先発の身寄り、知人を頼りに私費で、故国から逃げるように渡航した者もすくなくなかった。

請われての渡来だった。必要とされた移民だった。歓迎されてしかるべきだった。しかし、扱いは苛酷だった。ムチ打ちなどの暴力沙汰は日常のことだった。食料も十分ではなかった。熱帯性の季候は労働で衰弱した体をさらに痛めつけた。数多くの病人が薬も与えられず放置された。給料も中間搾取され、正當に支払われることがすくなくなかった。華人苦力の生活は悲惨だった。現在の首都クアラルンプールは中国移民でごったがえす開拓の町だった。道路はしばしば河の氾濫で泥だらけとなった。そして道の両側は鉾山で働く人夫が住まう小屋、賭場、アヘン窟、淫売宿などがひしめいていた。(鶴見, 1981.P-242) 北ボルネオのゴム・プランテーションでは、1890年末までに、8061名の労働者のうち、約2000名が病死した。90-91年の1年間に死亡率が70%に達した農園もあった。数多くのプランテーションで死亡率は20%をオーバーしていた。それ故、シンガポール、香港に向け逃げ出す者も数多かった。(Wong, D. T. 1998. P-25)

中国移民を搾取し、手ひどく扱ったのは同じ中国出身者だった。中国人が必ずしも一枚岩の結束を誇っていない、という具体事例である。イギリス植民地官僚は手薄で、仕事の

現場監督はほとんど中国人に任せられていた。かれらの間に支配、被支配そして雇用、被雇用の上下2分の関係が生じていた。コントロール側に立った中国人のなかには少数ではあった。かつて科挙をめざしたインテリもいた。労働者の側は自己防衛を策し、たとえばまず客家の人々を中心に秘密結社の組織がつくられた。しかし両者が決定的に衝突することはまれであった。苦力の団結力は弱かったし、また、経営者側が移民の損失大を予防するため労働条件の改善を実施し始めたからである。

華人移民の圧倒的多数が農民であった。しかし、しばらくすると貧窮の状態に到着したかれらの間にも貧富の別がすこしずつ生じてきた。煙草の葉、ココナツの実といった換金作物を売って得た収益をもって、石鯨、ロウソクを作る零細家内工業をおこす農民が出てきた。農業のかたわら樹を伐採し、それを売り、また輸出するため200名の男を雇うに至るまで金儲けに成功した農民もいた。かれらはその稼ぎで土地を買い足し、何人かは大農場経営者と成り上がった。錫鉾山を買収したり、読み書きソロバン能力をもった者は貿易業、金融業に手をそめた。はてはホテルのオーナー、ちいさな蒸気船の所有者まで現れ出てきた。大転身を果たした華人富豪のなかには病院の開設、学校の建設に寄付金を申し出る者もいた。

かれらにとって、マレーの地はもはや一時滞在の異郷ではなかった。新しい生活のための居住地であった。そうすると、自分たちの今日と明日の子孫のために医療機関、学校教育の場、そして、なによりも経済、産業活動の保証が不可欠となってきた。そのためには政治への介入、参加が必要だった。かれらはMCA(マレーシア華人協会)という政党を

組織し、現在、議席数においてUMNO（統一マレー人国民組織）、MIC（マレーシアインド会議）とともに組む与党3党のうちで第2席を占めている。

2. 文明の構築なきマレー

ボルネオにはじめて中国人が来島したのはいつごろのことか定かではないが、1519年、マゼランとともに渡来したイタリアの宣教師ピガフェッタは、現在のブルネイで中国の貨幣、陶器などを発見し、島に残された中国の影響の跡を認めた。（Wong, D. T. 1998. P-4）18世紀になると砂金が発見され、来島する中国人の数は急増する。その後、19世紀の始めまで中国から渡ってきた農耕民がかなりの数、奥地に分け入って行った。その頃、イスラム太守の統治下では、土地を開墾し、そこに住み着いてしまえばその土地のオーナーになれた。周囲の樹をいくら伐採し、売りに出しても咎められることはなかった。

この当時、地域一帯の人口は希薄だった。1830年代にはマレー半島全体で約30万人しかいなかった、といわれる。1834年で42万人、その後約100年を経た1931年でも439万人でしかなかった。うち、39%が中国系移民だった、という。（鶴見. 1981.P-281）半島には熱帯雨林におおわれた山岳部が多く、平野部はわずかだった。半島の東西海岸部トゥレンガヌーとクダー地方を除き、稲作が大きく発達する余地はなかった。1916年になってもマレーの米の自給率は18%でしかなかった。（鶴見. 1981.P-284）

人が定住しやすいのは稲作が可能な地帯である。耕作に適した平野がすくないので、半島とボルネオ島の全域にわたり人は河川に沿った小集落をつくり、細々と小農業を営み暮ら

していた。東南アジアの多島海を我が物顔に牛耳っていた海賊が河をさかのぼり攻めてくると、人々はやすやすと生活用具をたたみ山地の奥に避難し、海賊が去るとまたもどってきた。限られた農耕しかできず、河を利用して流域一帯を気ままに横行できるかれらはなかなか定住民とならなかった。財の蓄積がないから容易に根づかず、王国は誕生しても、大きく発展しなかった。おそらく14世紀末から110年間ほど続いたマラッカ交易王国を除き、文明の構築に至りつくまでの人の堅固なまとまりが生まれ出なかった。

民の生活は貧しかった。長期におよぶ継続、継承の前例をもたない土地の支配者は、育てる、増産をはかる、計画的に発展を策するというマインドをもっていなかった。海の民、砂漠の民同様、生活手段は略奪であった。農民は富を増やすことができなかった。生産の形は昔ながら進歩せず、大きく改良されることはまれだった。王国、文明の興隆に不可欠な安定がないので民は活力源となれなかった。鶴見良行氏は、19世紀のマレー人アブドゥラーの言葉を引用している、『パハンの貧困は、その地付きラジャやほかの貴族の圧政と残忍さへの、耐えざる恐怖の中に生きているという事実の中にある。彼らが生み出すどんな利益も、地位の高い人々に強奪されることが確かであれば、彼らが精力的になることは無意味だった』（1981.P-139）

極論すれば、マレー一帯には、マラッカ王国を例外として、人はまばらにいて、強固な社会組織がなかった。河口と河川の流域に分散孤立した小規模な人の集落があるのみだった。その人グループはひとにぎりのリーダー層に支配され、その下には中核となる結集陣容もなかった。砦、城郭とよばれるにふ

さわしい堅牢な権威の威容、外敵に対する防衛の要もつくられたことがなかった。広がりやを欠いた地勢、希薄な人数、移動する拠点、統治能力のない支配者、貧困な生産力などが集団の強化を妨げ、民族としてのまとまりを成立させず、その結果、地域から国家へと連なる同胞連帯意識が育ち上がることはなかった。

鶴見良行氏の言う移動性と分散性を特徴としたこの社会は、強力な外来勢力に直面したとき、ほとんど抵抗らしきものをももちえていなかった。封建的な大義、忠誠心という心情によって結ばれた臣従関係も発達していないローカルな集団は次々と侵攻してきた異民族の武力にアッという間に屈服し、その異質な新しい文化にも同化されてしまった。15世紀の中頃にはイスラム化が完了する。その後、16世紀の初めにポルトガルが、17-8世紀にかけてオランダがついでイギリスが続々と、国力を挙げて艦船に砲と兵隊を乗せて到着すると、統一国家という枠組みすら構築できないでいた東南アジア諸地域はたちまちのうちに西欧列強の植民地というくびきを科せられてしまった。

フィリピンは16世紀スペインの統治下に入り、ヴェトナムは1887年に仏領インドシナ連邦に編入され、19世紀中頃にはイギリスの全インド支配が完了していた。インドのセポイの乱、西アフリカでのサモリ抵抗軍との戦いといった殺戮なしにすんだマレー半島の植民地化は、イギリスにとってまことに容易なもうひとつの海外領土獲得であった。

アフリカ、南米、東南アジアはまずヨーロッパの軍門にくんだり、ついで征服者の文化コードを押し付けられ、引き受け、少なからぬ住民がついには頑ななイスラム信徒、キリスト

教徒へと変身していった。そして、独立後もこの刻印は執拗に残っている。ここから、移植された外来の価値が国の伝統となり、それを除けば自国をまとめ、統一する理念がほかに見当たらない、という国家運営上のむずかしさが生じてくる。とりわけ、その価値が時代の趨勢とズレを生じているのではないか、との疑問が国の内外から少なからず寄せられるようになったとき、その国定の自国アイデンティティは、必須の近代化という課題を前にして、国がかかえるジレンマの大きな温床となってしまう。イスラムを国教と定めた現在のマレーシアもそのひとつのケースである。

このジレンマは、諸法則、諸原理の根本と認めた価値体系が、競争の場において、他の思考、行動規範を凌駕できないばかりでなく、かえってその異なるものに劣り、もしかすると逆に凌駕されてしまうのではないかと危惧されるとき、深刻な葛藤となる。今日のマレーシアで、総人口の6割を占めるイスラム教徒のマレー人が、3割の非イスラム教徒の華人との経済競争に、どうしても勝ることができない。なぜなのか。国外に生活するマレー人のなかには、自身イスラムの信仰を保ちつつ、母国で日常の習慣をつくっているイスラムの文化活動が退嬰的だから、と批判する声もある。¹⁾

3. マレー人優遇政策

1941年マレー半島に上陸した日本軍は、1年を経ず、ボルネオ島までの全域を占領し、シンガポール在の華人を虐殺し、その財を奪うなどの軍政をしいた。そして、1945年、日本の無条件降伏、敗戦により第2次世界大戦が終了した。マレーにもどってきたイギリスは、民族の別を問わず全員に平等な市民権を付与するマラヤ連合案を発表するが、温存さ

れてきたマレーアイデンティティのシンボルともいうべきサルタンとマレー至上主義者がこれに反対、3年後の48年、民族区分代表による合議制にもとづくマラヤ連邦が成立した。マレー人、華人、インド人が自分たちの政党を議会にもち、たがいに内政不干渉かた相互協力して自分たちの国マレーシアをさらなる発展に導く、という趣旨にもとずいてであった。その後、マラヤ共産党の武装蜂起に手を焼いたイギリスが植民地政策を放棄して、1957年独立国家マレーシアが誕生した。

その12年後の1969年、『5月13日事件』が勃発する。下院と州議会の議員選挙に勝った華人系複数政党に属する青年グループが首都で派手なデモ行進をしたのが12日だった。そしてその翌日の13日にはマレー系の青年たちがこれに対抗デモ行進を組織、そして、両グループが衝突した。この暴動は全国に広がり、公式発表によれば186名、非公式発表では500人以上の死者が出るという一大流血惨事となった。（吉村、1998.P-15）

14日、政府は全土に非常事態を宣言。7月1日には新経済政策——これは91年に、2020年までに先進国の仲間入りを果たす、を公約とした国家開発政策へと継承される——が発表され、同じ月の30日には、マレー人を優遇すること、マレー語を国語とすること、サルタンの地位を保全することなどについての批判を禁止する旨の緊急条例が公布された。71年に入ると、公共出版物にはすべてマレー語が使用されること、大学入学者もマレー人を優先すること、マレー人の就業率を高めること、などが政府の方針となって発表された。もともと外来者の華人、インド人らは、弾圧と迫害を恐れ、この公然たる非マレー人差別政策を前にしても沈黙を守った。

マレーシア国家の急速な発展はかれらの沈黙に因るところが大きい。もしかれらが自分たちの立場をゆずらず、言語、市民権などの争点において、妥協、協調をしなかったならば、この国の社会は相次ぐ紛争、内乱状態に陥っていたかもしれない。世界各地にみられる多民族国家分裂の悲劇、惨劇をこの国も避けられなかったかもしれない。

この事件を引き起こしたのは、人口の3割弱を占めるだけの華人が国の経済を制御しているという現実にたいするマレー人の憤りであった。植民地時代には、大陸中国の発展を視野のうちに入れたイギリス行政当局が、英語教育をほどこすなど中国人を優遇し、そのかたわら現地のマレー人にはさしたる配慮もなかった。この厚遇を利用し、中国人はイギリス行政に取り入り、何人かは流通を支配し、金貸し商人ともなった。錫、ゴム産業においても中間管理職につくとマレー労働者の上前をはねるのが常だった、などマレー人の非難の対象となっていた。やり手の華人は英国人よりもマレー人に嫌われ、憎まれていた。

1970年統治、マレー人の平均世帯月収はインド人の約3分の2、華人の半分以下であった。貧困世帯率もマレー系はインド系の1.5倍、華人の2倍以上であった。（吉村、1998.P-15）国内の治安回復、政情安定には、マレー人の収入増、貧困退治が是非とも必要との判断が当然あった。

60年代、マレーシア経済はいぜんとして伝統的一時資源産物であるゴム、錫の輸出に大きく依存していた。トゥンク・アブドゥル・ラーマン初代首相は工業化の第一歩としてまず輸入代替産業の育成を試みた。というのも、当時3.3%という高人口増加率を農村をベースとした産業セクターでは吸収できないから

だった。事実、失業率は1957年の2%から1970年には8%へと跳ね上がり、安定社会の赤信号となっていた。(Abdulai. 2001. P-168)そして、70年代から80年代にかけて、政策の根幹は輸入代替から輸出促進へと進展し、その具体実現のためには製造業の発展が不可欠であり、人、技術、資金のあらゆる面で工業化の条件を満たし得ない後発国マレーシアは外資の直接導入に国運を賭けた。国は、受け皿としての人材開発そして国内政情の安定、という2大目標を達成するため、国民の60%ほどを占めるマレー人の不満解消、生活改善の具体化に向け、国策の舵を大きくマレー人底上げへと切った。

そのため、強引、非民主的、反平等処置のそしり、非難を覚悟のうえで、ときのラザク第2代首相は、雇用、認許可権、貸付金、教育などなどの分野で全面的にマレー人をサポートする、マレー人最優先方針を議会で決定、その一方で反対論封じのためマスメディアには厳しい言論統制を科した。この方策はマレー人をさす『土地の子』を意味するブミプトラ(Bumiputera)政策とよばれ、歴代の政府はこの国策によってマレー人が国造りの中核へと育ち上がり、マレー人主導による国家運営を策してきた。そしてこの国是は現在も1982年来政権の座にあるマハティール首相によりひきつがれている。

このマラヤ化は、政府が支給するパイの偏向分配となり、マレー人に配分が大きくなる分、華人、インド人への配分はちいさくなった。行政の差配が大きな意味をもち、それだけ官僚主導がはびこり、活発となった。そして、公務員はほとんど全員マレー人によって占められ、行政の主要ポストにもマレー人が当てられる割合が高まった。2000万国民のう

ち80万人といわれる公務員の職の大部分、すなわち、空港港湾、バス、鉄道などの運輸、司法、警察、移民局などの治安当局、財務、税務などを扱う地方行政、学校教育などの分野で働く大半の役人、職員のポストがマレー人に割り振られた。非マレー人に残された自由活動の場は私企業であった。金融機関、中小企業などそして学校まで公に依存しない私設、私立の組織を自前で用意しないことには、今日の生活を明日への生活につなげていく保証がなかった。

多くの、無数とも言える分野で華人は締め出された。金融面での支援資金配分ではマレー人が厚遇されており、華人への配分資金難から多額の資本投入を要する製造業分野への新規参入はむずかしくなった。運送業、完成車輸入業などの許可は、原則、マレー人にしか付与されず、また、土木建築、鋳工業などの公共事業契約の取得においても華人は差別されている。1970年以降、輸送、丸太伐採のライセンスはほとんど全部マレー人に供与され、たとえば1985年度マレー人が獲得したライセンスは輸送業において63.9%、丸太伐採業では73.5%にのぼった。行政にバックアップされたマレー企業に非マレー人はかなわない。国公立大学への入学者数でも、マレー人学生が占めていた比率は、1970年の40%が1977年には69.3%に高まった。教育というこの国民が有する基本的権利への侵害にマレーシア華人協会は強く抗議し、1978年、政府は入学者割り当て比率をマレー人55%、非マレー人45%へと譲歩、改めた。(Chan Kwok Bun & Tong Chee Kiong. 1998. P-5, in The Chinese Diaspora)

一見したところ治安は良く、衝突回避の調整作業は機能しているようにみえる。が、そ

の実、水面下では賄賂が横行し、とりわけ強権をもって押さえ込まれた華人のフラストレーションは解消されることがない。東京で日系大商社に勤務するマレーシア華人の友人はきっぱりと言った、『マレー人とわれわれは水と油です。共生することはできません』²⁾

マレー人優遇、非マレー人冷遇のブミプトラ政策は民族間経済格差をなくすことに成功したのだろうか。69年に発表された新経済政策は土着マレー人の資本所得を30%に引き上げることを目標として掲げていたが、20年を経て実績は70年の2.4%が90年に20.3%にとどまって終わった。(吉村. 1998. P-19) 途中79年段階での民族別世帯平均月收入は、マレー人の513リンギにたいし、インド人が776、華人が1094 (Lee Kam Hing. 1998. P-34 in The Chinese Diaspora) と、マレー人、インド人、華人の1対1.5対2、という相互比率は10年前の79年と変わっていない。医者、技師、会計士、弁護士といった知的職業はほとんど華人によって占められているし、上記の資本所得にしても非マレー系が占める比率は1970年の33.2%から90年にはかえって46.2%へと増えている。外国資本の持ち分に華人が食い込んだ結果である。(吉村. 1998. P-19) 多くのマレー系の人々が、中国系の人々に比べれば、いぜんとして収入もすくなく、貧しいのではないかと想像される³⁾。

とはいえブミプトラ政策がマレー人の生活レベル向上という当初の目標達成に無力であったわけではない。吉村真子氏の調査報告によれば、この国策の成果として就業構造比においてマレー人の職業は、徐々にではあるが、第一次産業から第3次産業へと移行してきた。1970年の農業ほかの従事者66%が90年には29%にまで減少し、サービス業種に就く者の数

は70年度38%だったが90年度には51%へと増加している。(吉村. 1998. P-19) けれど、第2次産業の製造業に働くマレー人の比率も増えてはいるのだが、まだその大半がブルーカラーの単純、未熟練工の段階にあり、技術職、管理職はほぼ全部中国人系によって占められている、と在マレーシアの日系家電メーカーの日本人幹部は指摘する。マレー人は従来の農村セクターを離れ、すこしづつ町、都会の近代部門セクターへと生活の場を変えつつある様子だが、経済活動の核心はまだまだ華人によって握られているのが現実である。

それでも、マレー人の資本所得は、いまだ多くの分野で30%のターゲットには届いていないけれど、1998年度、運送業で29%、建設業で25.1%、金融業で16.8%、製造業で8.7%へと増加した。(Noor & Azaham. 2000. P-103) 独立当初マレー人の経済力が国の経済力全体に占める割合がわずかに2%でしかなかった、という事実と比べれば、格段の躍進といわねばならない。一世代を経て、マレーの子ブミプトラは国家所得のおよそ20%を有するまでに成長したのだ。意志、意欲も育ててきた証しと言えるのではないか。そして今日、マレーシアは世界に数あるイスラム国家のうちで繁栄のモデル国家と称されるまでになった。製造業における経済成長率が1988年からアジア金融危機が勃発した97年までの10年間、年平均8%を維持し、その製造業が輸出に占める割合は1970年の11.9%から1997年には80.9%へと7倍近くも増加した。国は国産車プロトンをもち、また、エアコンの製造量では世界1を誇るまでに工業化を成功させている。(Abdulai. 2001. P-170)⁴⁾

概してマレー人はいい人たちだ、とも言われる。いわく、優しく思いやりがあり、いん

ぎん丁寧で、人当たりよく柔和温和である、など。あくどくなく、批判的攻撃的でなく、2枚舌多面体の複雑さがなく、とも。ある日系企業のマレーシア駐在員氏によれば、自分が犯した過ちについて、中国系の社員なら猛然と非は自分になんと言いつてくるのに対し、マレー人社員はほとんど言い訳の言葉もなくうつむき黙っている、のだそうだ。

このマレー人のおとなしさは自分に自信がないからだ、とも評される。イスラム教徒といいながら、どこまでその教義を信じているのか。自分自身の仕事についても不確定部分が多すぎて、もうひとつやる気がおこらない。競争のスタートラインで立ち遅れてしまうと、もう取り返しがつかず、ズルズルと敗退していつてしまう。劣等感が昂じて優越者への依存心が高まる。受け身の姿勢からは競争心、創造力が育ち上がってこない。自信喪失、他力本願、努力不足、無計画性などがマレー人社会を脆弱にしている。そして、なかには自分たちの経済力の弱さを厚かましく、破廉恥な華人のせいだ、と華人をスケープゴートにして言い逃れに終始する人もいる。

しかし、なぜマレー人は自己確認に弱く、自信を築き上げることに不得手なのか。ときに、なぜマレー人の知的怠惰は遺伝的、とまで言われるのか。学校でも職場でも、なぜ秀でようという意志を強くもつことが少ないのか。なぜ、目的もなく成り行き任せの人生がマレー人により多いのか。

それでもなんとか生きてこれたから、だろう。いちじるしい発展、巨富を積み重ねる繁栄などは望み得ないにしても、親代々最低限の生活は保証されていた。生命が脅かされ、食いつぶされて渡来した中国系移民が身につけていたしたたかな開き直りとは比べようも

ない、おだやかなその日暮らしだった。イギリスの植民地政策がマレー人の「薄弱」な意志をさらに去勢してかかった。圧倒的破壊力と生産力を併せ持つ強者には逆らわず、その意に添うて生きるのが得策、という弱者の「知恵」を習性としてしまったのではないか。

マレー半島中央部での稲田耕作は、80年代に韓国モデルを導入したことでやっと近代的灌漑施設をもつことができた。それまでは昔ながら、技術の恩恵なしに古い耕作が続けてきた、という。(Taib, M.1995.P-48) 封建的体制は人々にやる気をおこさせない。仕事への積極的な取り組み、参加を促すような社会システムがなければ国は前に進めない。うたたねを続けるよう条件づけられてしまった国民を目覚めさせ、奮起させるためには、近代化に向けた国家建設のヴィジョンをもち、それを着実に具体化していく強力な指導者の存在が必要である。マレーシアの再建はマレー再生から始まる。

マハティール首相は自著『マレー・ジレンマ』(1983. P-29,32,78,128)のなかで、『かえるの子はかえる』だからと、マレー人の遺伝的劣性の可能性について触れたあと、中国系人に比べ、マレー人が経済、教育の両面で立ち遅れていることを認めている。マレー人は伝統的木造家屋の建築だとすばらしい大工の腕を発揮するが、レンガ、モルタル工法となるとこれを積極的に学び取り入れるようとしないから、結局、その新建材の使用を学習した華人の建築家に雇用されてしまう、と嘆いている。礼儀正しく丁寧で、慎み深くでしゃばらないが、新を学ぼうとせず、無計画のまま時間を過ごし、この19世紀から20世紀にかけて世界経済を席卷したダイナミックな進歩、発展についていけず、取り残されてしまった。

かつてのローカルな生活では村人が日々の暮らしに困るようなことはなかった。なんの工夫、努力をせずとも極度の飢え、餓死とは無縁の生活だった。しかるに中国人は洪水、飢饉、戦乱に悩まされ、生きるとは耐えざる闘争の歴史だった。海外へ積極的逃避を敢行したかれらは冒険心と機略に富んだ民族へと成長した。あらゆる部門において勤勉で意欲的な中国人が富を増大させているかたわら、マレー人は後進するばかりだ。とくに教育と経済の両面においてマレー人を優先的に支援しなければ、両民族の格差はますます拡大し、ついには国の秩序が崩れてしまうだろう。と、首相は、歴史環境の相違が生み出した潜在的なマレー人の劣性、中国人の優勢を認め、多民族国家を運営していくためにはプミプトラ政策の実施が欠かせない、と結論づけている。

II. ダブル・アイデンティティ

『横断と変身』

かつてマレーに進出したイギリスほかのヨーロッパ植民者は、土着マレー人の柔和、温和な性格をほめる一方、かれらを怠惰、不精とけなし、中国系移民については働き者、機敏そして貪欲、粗野と評した。(Ong, A. 1997. P-183) マレー人はのんびりした運命論者、中国人は利に聡い自力開拓者、インド人は気まぐれな奉公人、というのが3民族についてはほぼ定着したイメージであった。インド人を別にすれば、マレー人と中国人両者の性格は正反対のコントラストをなしていることになる。経済活動の場では、マレー人は人の良い敗者、中国人は競り合いに強い勝者と色分けもされてきた。

その通りだとして、損得を争うに際しての両者の優劣はなにに因るのだろうか。ひとつ

の答えは、マレー人のシングル・アイデンティティに対する華人のダブル・アイデンティティだろう。前者の一所安住のローカル性に対する後者の試練を経たグローバル性と言ってもよいだろうか。

世界が交差の度を増し、目新しいライフスタイルや異なる心情と隣り合わせ、『未知との遭遇』が日常化してくると、『シングル』のままではその適応に難渋する。いきおいマルチになることを強えられる。競争の場では先にマルチ度を高めた者の方が有利となる。1970年に入り活発となった資本の移動、多国籍企業の活躍などの国際化が人のひんぱんな往来をうながすようになってきたとき、マレーシアでは、マレー人の大半がまだ先祖伝来の村落でまどろんでいる一方で、自身移入民家族の一員である華人はすでに異文化接触とはなにか、理解困難な生き方との共生とはなにかについて、一家言をもっていた。

経済プロセスが国際的となるにつれて、未知の文化を経て行き来する人は柔軟な相互性をもたざるをえない。出て行った先の文化パターンの規定に合わせる。すくなくとも、ひとつの信仰、ひとつのイデオロギー、ひとつの行動規範にも異を唱えない。公共の領域では自己を保ち、固有の価値を大切に、特性を守り育てる。異郷に生きる人のアイデンティティはダブルに、そして、マルチになる。

グローバルな体験を経てきた者の民族的アイデンティティは堅く閉ざされた一面体ではない。多様な異質との遭遇にさいし、判断基準はひとつにとどまらない。『かならずしも all or nothing ではなく、状況により、それぞれ異なったアイデンティティを主張できる』(Chan K.B & Tong C.K. 1998 P-4, Foster in The Chinese Diaspora) 多様性とは近代の

産物のひとつである。排他的な唯一絶対の基準をもって生き抜くことがむずかしい世になってきた。自己の文化と他者の文化を掛け合わせて、『第3の文化』が生じてくる。

華僑、華人と称される人たちは、多かれ少なかれ、このグローバリゼーションの産物であるダブル・アイデンティティを活力源として、また能力として身につけている。この中国系人に比べるとマレー系の人たちのなかには、従来の生き方にひきずられ、ダブルという適応力、柔軟な可変性を十分に駆使できず、またやりくり上手な多面体、複合体になりきれていない人がすくなくない、のかもしれない。

海外在住中国人の間で、信用を介しての絆は長いこと習性となっている。同族、同郷の『兄弟たち』との間に張りめぐらしたネットワークをとうして、情報を交換し、相互に行き来して新天地を開拓する。1ヶ処に根づいて固定された型のうちに入るのではない。ひとつだけの確信に凝り固まるのが先細り、危険なのを予知している。変化への対応が用意されている。利を求め移動する。行く先々の社会を構成している歴史文化を吸収し、それに自分を合わせる。『横断と変身』(Nonini, D.M.1997.P-222)が華僑、華人の特性である。変幻自在なカメレオンのように異なる周囲の色につぎつぎと自分を染めあげていく。しかし、自身の本体は元のまま不変である。

その地の国旗に敬礼し、言語を学び、法令を順守する。タイにあってはタイ語学校に学び、兵役に服し、国王への忠誠を誓う、だけではない、成功すれば、タイの貧しい学生に奨学金を提供し、病院に最新の機器購入費を寄付し、スラムに住む人々向けの救援活動に参加する。現地社会への利益還元を忘れない。

異郷ではあってもその社会にとけこみ、良き市民たる努力を怠らない。

容易にできることではない。社会の異分子、変なひとかけら、マージナルな弱者からスタートして自分の居場所をつくっていく。最初のうちはほかに行く場所もない難民、どこの馬の骨ともわからない闖入者として不審の目で見られ、さげすまれ、無責任な好奇心の対象とされながら、新しい環境のなんたるかを学んでいく。屈辱に耐え、誤解、無理解を忍び、孤独を処理する。言葉を習得し、親しめず受け入れがたい生活環境をも徐々に受け入れ、批判悪口を慎み、とにかく絶えず頑張るしかない。その地にあっては価値なきマイノリティの一員として下からはい上がって行くその過程で、移民は打たれ強い抵抗力としたたかな根性を我物としていく。神戸華僑のリーダーが次世代の若者に説いた心構えは以下のものであったという。『ここは日本。私たちは外国人だ。権利が制限されているのはやむおえないし、義務は忠実に果たさなければならない。そして、なによりも日本の社会から愛される華僑であらねばならない』(神戸新聞社.1987. P-187)

『無数の肉体的、精神的な締め付け、強要、押し潰し、無意味な禁止、独断、圧殺、荒廃、サディズム、ひそかな陰謀、屈辱』(Nothomb, A.1999. P-87)

これは、1990年代のはじめ東京で日本の大企業に1年間努めた、日本語通と自称するヨーロッパ女性が職場のシステムと人間関係にあげせた呪いの言葉の一部である。彼女に取り日本的に管理された組織の中での毎日は耐えがたかった。共有の余地のない世界は彼女のうちに反発、嫌悪、敵意を生み出した。彼女のアイデンティティは、融合に向け開く代わ

りに、保身と反撃の構えを続ける過程で堅く閉ざされ、強化された。異邦人として同じようにマイノリティながら、このヨーロッパ女性には、帰りに行く先の母国があったので日本は一時滞在先であった。成熟社会であるヨーロッパの母国からみれば日本は未熟な先進社会への新参者であり、いまだ歓びからほど遠いストレス過多の生産優先労働大国であるかもしれない。共生、共有にふさわしい価値をもっていない、と、彼女は日本の努力、苦勞を断罪し、拒否して自分のアイデンティティにもどっていった。適応にではなく、批判することに知性の証しがある、と規定できるのは先進国に生きる富裕者にのみ許された特権でもあろうか。

大方の欧米人にとり欧米世界が自分たちの定点、定住地である。出て行って、もどってくる場所である。憩いと安眠を保証してくれるマイホームである。大陸中国を離れ、そこをもはや母国とはみなしえない多くの海外在住中国人にとって、現住地が絶対の定住地である、と言い切る自信はない。かれらは、根を張りながら、いつかその下ろした根を引っこ抜き、それをもってよそへ移って行くかもしれない、という根無し草的在り方を通奏低音のように響かせもっている。

経済的に余裕ある家庭は成人したこどもを英語圏の大学に送り出す。それもオーストラリア、カナダ、アメリカ、イギリスなどに分散配置して留学させる。これは、将来の国際活動に備え、世界各地にネットワークの拠点をつくる用意でもあるが、たとえば現在の居住地である台湾が危うくなったときの移転先を考えての前準備でもある。わたしにとっての我が町はクアラルンプールだが、両親にとってはいぜんとして福建省、こどもにとっては

トロント、という家庭は職場と居住地を世界の3地域にもつことも可能である。女の子を外国の大学に送るとき、両親は娘が学位に加え、その地出身の良き夫をも得ることを期待する、といわれる。

『移動者は可変体になる』（Xin Liu. 1997.P-108. in Ungrounded Empires）インドネシア国籍をもつ人が中国系であり、ジャカルタで公務員として働いた後、オーストラリアに渡り経営学専攻の大学院生となり、伝手を頼ってロンドンの商社に勤務し、そこから派遣されて今広東にいる、という人の今後の人生はどう展開するのか。再適応につぐ再適応のあとは、またまたの再適応かもしれない。希望としてのプランはあるが、あらかじめ敷かれたレールの上を走るタイプの人生を考えていないので、とりわけ若いうち、先のことは彼自身にもわからない。1ヶ処定住、同職種担当の終身就社の代わりに、数年におよび国境と文化圏を越えて、転職を重ねて行く人生行路なのだ。ひとりの人のうちに多様な世界がつまっている。ひとりの人がひとつだけのアイデンティティをもっている、との規定が当てはまらない人たちだ。

広大な距離を旅し、多彩な空間を生活している華僑、華人は自分自身を常に増殖させている。営利資本主義の活動がグローバルに拡大されるにつれ、海外に生きるエネルギーな中国系の人たちは、その波に乗り、ますますボーダーレスな脱領域へと突き進み、アイデンティティを増幅させていく。拡散、四散の継続はどこにも根付かない不毛の結果に終わる、と言えるかもしれないし、どこにとらわれることがないので絶えず多方面な活力の生産に貢献する、とも考えられる。経済不況に痛めつけられた英国は、国家のアイデンティ

ティという危険な防御態勢へと後退した、との時評 (Ong, A.1997.P-175,Hall,s) もあるが、そもそも不況に陥ったのは国民マインドの縮小という『危険な防御態勢への後退』に起因したのではないだろうか。

海外在の中国系人のなかには、よれよれの姿で波打ち際に引き上げられた難破者、乞食同然の祖父母をもっている者もいるだろう。錫鉱山またはゴム農園での日雇い労働者の息子がしがらない小売商人になり、そのこどもが交易ビジネスマンへと出世し、……とかれらが昇りきたった道筋を描く家族史のページは苦難の描写でいっぱいだろう。そのドラマチックな苦労の連続が一家のバネとなった。この闘う華人家族のうちから出て来た何人かの逸材が今日国際化の密度を高めていく世界のもっとも最先端を先駆けしている。かれらは今後加速度的に進んで行くだろう諸地域横断の動きのひとつの原型となっている。

注

- 1) 『イスラム圏内には、国際化のプロセスにも大きな潜在力をもっているはずなのに、十分発展を成し遂げたという国が見当たらない。イスラム教徒は安易な生き方をしているのではないか。西欧文化の侵入と欧米の経済優位に対抗できなくなると、しばしばかれらはイスラム思想の正統性を鼓舞しその影響力を高め、イスラムのかつての栄光の日々への郷愁をかきたてるようなことをする。しかし、このような反動的行為はイスラム自体にとり有害である』(The New Straits Times, 28,03,2001)
グローバリゼーションとイスラムという組み合わせについては、上記の同日付けの新聞紙上で、イスラム教徒であるマハティール首相みづから、自身危惧するところを率直に述べている。『このままでは、イスラム教徒はグローバリゼーションのさなかで重要な役割を演じることができないだろう。もし国際化の動きへの対応に世界と意見の一致をみることができないなら、国際場裡においてのけ者にされ、現状不適応とみなされる危険がある。今日のイスラム教徒は、かつて先祖がイスラムの黄金時代に天文学、哲学、医学、数学に取り組んだと同じように、バイオ、情報科学がもたらす変化、革命に対応することはできないだろう。』
- 2) 国の主要日刊紙には、民族間の調和、融和という政府の悲願に冷や水を浴びせかけるような記事も掲載

されていた。『諸民族の統一、まとまりといったものは自然にできあがるものではない。われわれは本当に民族間の一体感なるものをもっているのだろうか。調和などないのだ。他民族などいないも同然だ。ちがう人種の人々への共感、関心、愛情といったものをいっただれがもっているというのか』(The New Straits Times, 31,03,2001)

- 3) そして、マハティール首相の談話。『マレー人はみずからの態度を変え、もっともっと働かなくてはならない。マレー人は、政府の多様な援助政策、努力、優先権の授与にもかかわらず、国全体の経済力のたった19%を占めているにすぎない。もしマレー人のうちに代々果くってきた病気が癒されないならば、経済の不平等はけっして解消されないだろう。』(The Sun, 25.03,2001)
アレーシアは今なお、強権政治に支配され、それ故、マスメディア報道にはすくなくならず規制が課されている国である。半世紀前まで発展途上にあった複数民族社会が急速な経済発展を遂げるためには、国社会に秩序あるまとまりが必要であり、そのためには国政にたいする反論、批判、告発はなるべく抑さえ込まなければならなかった。公表の形をとらない水面下で、さまざまな非、反合法的な巨額取引がおこなわれてきた模様である。ブミプトラ政策から真っ先に最大の利益を得たのはマレー人の政治家、高級官僚とかれらの身内だったろう、と言われていいる。(Noor & Azaham, 2000,P-101) 世界のほかの地域と同じく、政府が懸命に尽力しても、政財界の癒着がもたらす汚職、収賄は防ぎようがない。コネをとらし、さまざまな優遇処置、利権に加え、国营、公営企業の民間払い下げを受けたマレーの上層階層は、Credit,Car,Cash の3Cを誇示する私企業オーナーとなり、一般大衆より1世代早く欧米並みの生活享受を可能にし、高等教育を我が身とこどもに確保し、高収入を明日につなげた。マハティール首相は、マレー人はもっと働かなければならない、と言っている。しかし、官によらない公論は、貧困退治、公正、平等に向けた社会の再構築という政策の2大目標の早期達成を阻んだ一因として、利権獲得にからんだマレー人自身、とりわけその労少なくして利過大の特権階級を槍玉にあげている。
- 4) 30年ほどで、マレーシアは産業形態を急速に近代化させた。1970年代、一次産品のゴムと錫が輸出に占める割合はそれぞれ33.4%, 19.6%だったが1,997年にはそれぞれ1.3%, 0.2%へと急減させ、その分製造業分野の輸出を激増させた。(Abdulai,2001,P-170)
- 5) 『4倍も5倍もの値段をふっかけて売ろうとするなど、とても自分にはできない』とマレー商人が中国系商人を非難する。『ワイフがタイ出身だからちょくちょくタイに行くんだよ。地方の中都市だけど、皆こう胸の前で両手を合わせて挨拶してから話し始めるんだ。たがいに敬意を払い、感謝し、謝るべきは謝ってるんだ。ところが、ここはどうだ。あいつらのせいで(華人) 商売はあがったり。生き馬の目ん玉も引き抜くって感じで、カネ、カネ、カネだよ。ここはアメリカだよ』(09,2001、クアラルンプールで)

参考文献

Noor, Ismail & Azaham, Muhammad, 2000, *The Malays par excellence*, Kuala Lumpur, Pelanduk.

- Jomo, K.S. edited, 1999, *Rethinking Malaysia*, Kuala Lumpur, Malaysian Social Science Association.
- Taib, M.Haji Muhd, 1995, *The New Malay*, Kuala Lumpur, VC.
- Abdulai, D.N. edited, 2001, *Malaysia and the K-economy*, Kuala Lumpur, Pelanduk.
- Muhammad, Amir et al., 1997, *Generation*, Kuala Lumpur, Hikayat.
- Hock, Oo Yu, 1990, *Ethnic Chameleon*, Kuala Lumpur, Pelanduk.
- Wong, Danny Tze-Ken, 1998, *The Transformation of an Immigrant Society*, London, Asean Academic Press.
- Ong, Aihwa & Nonini, Donald, 1997, *Ungrounded Empires*, New York, Routledge.
- Wang, Ling-Chi & Wang, Gungwu, edited, 1998, *The Chinese Diaspora*, vol 2, Singapore, Times Academic Press.
- Godement, François, 1996, *La Renaissance de l'Asie*, Paris, Odile Jacob.
- Nothomb, Amelie, 1999, *Stupeur et Tremblements*, Paris, Albin Michel.

- マハティール・ビン・モハマド、1983、『マレー・ジレンマ』（高多理吉訳） 井村文化事業団
- 吉村真子、1998、『マレーシアの経済発展と労働力構造』法政大学出版局
- 鶴見良行、1981、『マラッカ物語』時事通信社
- 同上 1984、『マングローブの沼地で』朝日新聞社
- 樋泉克夫、1993、『華僑コネクション』新潮社
- 渡辺利夫、1998、『アジアの構図を読む』日本放送出版協会
- 田中直毅、1996、『アジアの時代』東洋経済新報社
- 神戸新聞社編、1987、『素顔の華僑』人文書院

- マレーシアの日報紙
- The New Straits Times
- The Star
- The Sun